

唐帝国への貢ぎ物について

—踊り子を中心に—

お茶の水女子大学 邱冠禎

外国使節が入唐のときに女子を皇帝に献上した事例は多く存在したが、日本はそのような事例が見当たらない。そのため、日本が女子を献上しなかった背後にある理由について疑問が生じた。本研究は、上記の疑問点を解明する前提の研究として、唐における踊り子の献上記事を分析する。

現在、踊り子に関する多くの研究は、彼女たちが文化的な役割を果たすことに焦点を当てている。しかし、玄宗皇帝と曹国が献上した踊り子である胡旋女の曹野那姫から生まれた壽安公主のような非常に珍しい事例があり、踊り子が政治的な意味合いを持っていた可能性があるのではないだろうか。そのため、本研究では踊り子の政治と外交に果たした役割に焦点を当て、それぞれの国の記事を分析し、その中で浮かび上がる違いと特徴に着目する。

壽安公主の母と同じく胡旋女として献上女性の記録は合計で7回ある。胡旋女は、胡旋舞を踊る女性を指し、この舞踏の特徴は舞筵（まいむしろ）で高速回転して踊ることである。胡旋女の出身国であるソグド国は、中央アジアのシルダリア川とアムダリア川間のソグディアナ地方に位置しており、古くから広域にわたるキャラヴァン交易活動をした国際商人を輩出しており、唐の西北の戦略上に重要な役割を担っていた。史料によれば、ソグド諸国が唐に軍事支援をしたいことを要請し、621～707年の間に約3年ごとに28回もの高頻度で使節を派遣していた。即ち、唐の政治と外交上においてソグド国は重要な役割を果たしていた。

それに対して、ソグド国以外の国の踊り子の献上に関する記録は、胡旋女子、女楽、日本国舞女の3回しかない。このため、踊り子の献上の目的と意義を解明しようとする試みとして、渤海が大暦十二年(777)に代宗皇帝に献上した日本国舞女とソグド諸国の胡旋女の献上を比較する。

また、白居易・元稹の「胡旋女」は当時の社会実態を反映する史料である。これらの詩では、胡旋女が踊るときの様子を詳細に描写するだけでなく、胡旋女が社会に及ぼす悪影響についても触れられている。これらの詩を検討することで、唐人の胡旋女に対する評価や、彼女たちの政治と外交上に及ぼす影響の一側面を理解することができると考えている。

以上のように、本報告では、壽安公主の例を含む踊り子たちに焦点を当て、彼女たちが文化的側面だけでなく、政治と外交において果たした役割を検証する。